

Hermann Hesse



Peter Camenzind

Gertrud

Knulp

Schön ist die Jugend

郷　愁・春　の　嵐
漂泊の人・青春は美わし

ヘルマン・ヘッセ

芳　賀　　檀　譯
高　橋　健　二

現代世界文學全集

1

新　潮　社　版

現代世界文學全集 1

郷愁・春の嵐

昭和二十八年八月二十四日 印刷
昭和二十八年八月二十八日 發行

定價 參百五拾圓

地方
賣價 參百六拾圓

譯者

高芳賀
橋健二

發行者

東京都新宿區矢來町七一
佐藤義夫

發行所

東京都新宿區矢來町七一
新潮社

電話九段(33)二一二五番
振替東京八〇八番

亂丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替へいたします。

印刷 大日本印刷株式會社
製本 共同製本株式會社

Printed in Japan

ヘルマン・ヘッセ、人と作品

ヘルマン・ヘッセ (Hermann Hesse) は、一八七七年七月二日、西南ドイツのカルヴ (Calw) に生まれた。銀ねず色のもみの森の美しいシュワルツワルトのなかの谷間の町である。シュワーベンとも呼ばれる地方で、由來、詩人の産地である。ヘッセ自身も、「シュワーベン」は詩人の國で、プロイセンは軍人の國だ」と言つて、その地方に生まれたことを誇らしげに、往訪の私に語つた。實際、ゲーテの生まれたフランクフルトを頂點として、西南ドイツのこの地方には、ゲーテと並稱されるシラー、童話で知られたハウフ、最もドイツ的な詩人ヘルダーリン、美しい抒情詩人メーリケ等々が輩出している。これらはいずれもヘッセの故郷から遠からぬところに生まれている。それらの詩人と風土とがヘッセを詩人にする上に大きな働きをしたことは争えない。初期の詩集にはどんなにたび／＼シュワルツワルトの森と谷と草地とが歌われていることであらう。彼が終始、都會から遠ざかつて、自然に近く生きてきたのは、故郷の風土の影響に依るところが少なくないであらう。

同時に、ヘッセがプロテスタントの牧師の家に生まれたことも、彼の詩人としての成長に深い関係をもっている。彼は、死ぬ少し前のアンドレ・ジードにあてて書いているように、舊教にも新教にも共產主義にも他のいかなる權威や機構にも從屬せず、飽くまで「獨り行くもの」であることを、はつきりと表白しており、自己に忠實に、自己のうちに神を求めて生きているのであるが、その求道的な魂と、プロテスト (抗議) する精神とは、祖

父以來の敬虔なしかも自由なプロテスタントの信仰によつて培われたのである。また、彼の深い豊かな教養も、新教の神學者でありインド布教師であつた父母と祖父母と、さらにその前にさかのぼる宗教的傳統に負うところが多いのである。

ヘッセの母方の曾祖父は「聖書のグンデルト」と呼ばれ、ネッカー川地方に知られた神學者であつたが、その子のヘルマン・グンデルトは二十一歳の時イギリスの實業家の傳道事業に身を投じて、布教のためインドに渡つた。ヘッセの短編「ロバート・アギオン」（『小さい世界』のなか）は、この祖父の體驗を潤色したものである。ヘルマン・グンデルトは、ヘルマン・ヘッセも學んだ、というより逃げだしたマウルブロン神學校から、チュービンゲン大學を出た精力的な學者であり傳道者であつて、またよく間にインドの方言を五つ六つ覺えた。そして二十餘年の布教に病を得て、歸國してからは、カルヴ出版社を主宰して、新教關係の出版にあたると共に、新舊約聖書をインドの方言マラヤラム語に翻譯し、マラヤラム辭典を作つた。それに對しイギリス政府から名譽年金を受けたほどである。この祖父はヘッセが十六歳の時に死んだが、ヘッセに大きな感化を與えた。敬虔なクリスト者であると同時に、バラモン僧のように見えた祖父が、ヘッセのインド物語「ジツタルタ」（『悉達多』）に刺激を與えたことは明きらかであらう。また、この祖父の持つていた豊富な藏書こそ、ヘルマン・ヘッセをして「世界文學の半分を征服させた」ものである。少年ヘッセは自分から學校を捨てたので、獨學で勉強しなければならなかつた。それを可能にしたのが、祖父の藏書である。ヘッセは、のちに書いた「世界文學をどう讀むか」のなかでもそれに言及し感謝している。

ヘルマン・グンデルトはインドでフランス系のスイス人ジュリー・デュボアと結婚した。そして南インドで生まれた娘マリーが、やがてヘッセの母となつたのである。インドへ寄せるヘッセの郷愁が、血のなかに深く根ざ

していることがうなずかれるのである。だが、マリーは最初イギリスの布教師アイゼンバークと結婚して、カラチ地方で相携えて布教に従事した。不幸にも、マリーは僅か四年ほどで二児をかゝえて、夫に死別した。そしてまた四年ほどたつてヨハネス・ヘッセと再婚した。これがヘッセの父である。ヨハネス・ヘッセは北ドイツ系のロシア人であつた。このようにヘッセは、ドイツ人を中心として、フランス人、イギリス人、ロシア人の血を受けている。彼が世界市民的な素質を持つてゐるのは偶然でないとと言える。しかも、父ヨハネスも若くして、スイスのバーゼルの傳道團に加わり、インド布教に赴いたのであつた。ヘッセの祖父母、父母、四人がそろつてアジアに深いつながりを持つてゐるのである。當のヘッセ自身も中年のころインドからシンガポールまで旅行してゐる。そして彼はもう三十餘年この方、イタリアを見おろす南スイスに住み、世界市民的な心境をいよゝ濃厚にしている。

ヘッセは、三歳の時、生地カルヴを離れ、父母とともにバーゼルに赴き、傳道館で九歳まで暮らした。父母の仕事は、アジアで布教に従事するものを養成し、その連絡にあたることであつた。同志社創設の新島襄もこのころヘッセの両親を訪れてゐる。そういう精神的環境も無視できないが、ヘッセ獨特の成長を促したのは、町はずれの廣い野原を絶えず獨りで歩きまわつたことである。さまざまの野の花とチョウチョが幼いヘッセの無二の友であつた。自然の姿と調べと魂とが早くから彼の心に刻みこまれたのであつた。終始、彼の作品に無限の詩情をもつて、描かれてゐる雲や川や野や花やチョウウや鳥は、このバーゼル時代からカルヴ時代にかけてヘッセの人間のなかに溶けこんだものであつた。彼の長編「ロッスハルデ」（湖畔の家）の主人公である畫家は、「人間が自分の經驗することをほんとに鋭く生き／＼と味わうことのできるのには、ごく幼い時だけ、せい／＼十三、四歳までのことだ。それを一生のあいだ食つて生きてゐるようなものだ」と言つてゐるが、それはそのまゝヘッセにあて

はまるのである。彼の作品のほとんどすべてが自傳的性質を持つており、特に幼少年時代のことが最も多く描かれてゐるのは、そのことを裏書きしてゐる。その意味で、ヘッセの場合は幼少年時代が特に重要性を持つてゐる。

この自然児はしかし最も育てにくい子であつた。父、ことに母は、ヘルマンの激しい生命力を持てあました。意地つばりで、いたずらで、亂暴で、強情な子で、母親は、ヘルマンという名を聞くごとに、悪い連想におびえるのだつた。だが、この我意の強さこそ、ヘッセを獨特な作家にしたものであつた。彼は後年「我意」という隨筆で、自分の心のほんとの聲にだけ従う我意の意義を強調してゐる。それはゲーテが西東詩編のなかで「自分自身をなくしさえせねば、どんな生活を送るもよい。すべてを失つてもよい、自分のあるところのものでいつもあれば」と歌つてゐるのと、符合するものである。「なんじのあるところのものとなれ」というギリシャの詩人ピンドロスの精神を、ヘッセはゲーテとともに最もよく呼吸してゐる。存在の意味と可能性と責任とを自我のなかだけに求める。その點では、「人間の運命は人間自身のなかにある」というのを根本命題とするサルトルの實存主義に通じるのである。ゲーテに次いでニーチェに最も多く學んだヘッセは、實存主義といふことばが行われ始めるよりずっと早く實存主義者だつたのである。たゞ彼はいかなる政治活動にも超然としてゐる點で、行動主義の文學とかけ離れてゐるが、彼が早くからドイツ帝國主義と絶縁して、孤獨な生活をつゞけてきたことが、とりもなおさず、抵抗の實踐を意味してゐたのである。

しかし、我意に生きようとする欲求は、終始ヘッセを、ことに幼少年時代のヘッセをはてしもない混亂に陥れ、極度な苦澁をなめさせた。自分にだけ従順であらうとするものは、世間で孤立しなければならぬし、異端者として白眼視されがちだからである。實際、少年ヘッセは、バーゼルでも、再びもどつたカルヴでも、學校はよく

できたし、十四歳で困難な入學試験を突破して、マウルブロンMaurlbrunの神學校にはいつたほどであるが、先生からは常に厄介者扱いされた。おそらく、型にはまらない厄介な生徒だつたに違いない。ついに、一家の希望と郷土の期待をになつて入學した神學校を半年あまりで逃げだしてしまつた。この學校は官費だつたし、そこを出れば、チュービンゲン大學に進み、牧師となつて、一生安定した生活の送れることが約束されていたのに、ヘッセはやみがたい衝動に驅られて、みずから軌道を脱してしまつた。それは、十三歳のところから彼にとつては、詩人になるか、でなければ何にもならない、という一事が明きらかになつたためである。そのいきさつは彼の自傳素描（要約された履歴）のなかに印象的に記されている。

母の日記によると、ヘッセはもう五歳ころから詩句のようなものを作り、即興的にピアノに合わせて歌つたり、寢床にはいつてから口ずさんだりしていたことである。詩は全く彼の天分の本質であつたことがわかる。しかし、詩人になろうというような少年は、教師にとつては常に鬼門である。ヘッセもその例にもれなかつた。伸びざかりの少年たちを假借なく型にはめようとする神學校にいたゝまれなくなつたのに不思議はない。

我意に生きるものは、自己の本質をみずからとらえ、自分の歩む軌道を自分で敷かなければならない。それは、ひとの敷いてくれた軌道を歩く場合とは比較にならないほど困難である。今、少年ヘッセは學校をさえ去つてしまつたので、生きる道の一切を自分で見いだして行かなければならなかつた。それは十五歳の少年には負いきれぬ重荷であつた。さすがに意地つぱりな少年も神経衰弱症になり、精神療法で知られた牧師のもとで療養中、自殺を企てさへした。この三年ほどのあいだ、彼は高等學校にはいりなおしても、教科書を買う金でピストルを買うという脱線ぶりで、また退學し、本が好きなので本屋の店員になつてみても、三日で逃げだすという始末で、自分も両親もなすすべを知らなかつた。まるで惡靈にでもとりつかれたようだつた。學校をつゞけさせよ

うとしても、職業につかせようとしても、どんな試みも失敗したので、父親は仕方なく、家で自分の手傳いをさせた。ヘッセにとつて希望のない息苦しい日がつづいた。その憂うつな心境は「車輪の下」に切實に描かれている。その主人公が自殺の方法を考えて日を送るのは、ヘッセ自身の身の上だつたに違いない。しかし、その間にも祖父の蔵書で勉強をし、詩作もつづけた。

結局、やせた非力なからだで、十七歳のヘッセはカルヴの機械工場にはいつた。教會などの塔の大時計の齒車を磨いたり、組立てたりする仕事であつた。かつての秀才少年が、今は、人に遅れて見習い職工となり、世間の冷笑を浴びなければならなかつた。それも「車輪の下」に描かれている。この小説の主人公はついに、自殺か過失死かわからない死に方をしてしまふが、ヘッセは生死の間をすれ／＼についに生き通した。彼が一年餘、職工生活をしたのは、後日の創作によい下地を與えた。「クヌルプ」(漂泊の人)の魅力は、その経験から發している。その他、「青春は美わし」、「ラテン語學校生」など、中短編に出る商人や職工などのユーモラスで悲しい小市民生活は、この時代と次ぎの書店員時代がなかつたら、あれほどしみ／＼とは書かれ得なかつたであらう。

一度はブラジルに渡ろうと考えたヘッセも、十八歳の秋、小さい大學町チュービンゲンの本屋に勤めることになつた。やつぱり本は彼の性に合つていた。それに、世間でさん／＼痛めつけられ、だいぶ心も練れてきたので、今度は身が固まつた。思えば、長い迷いと苦しみと絶望の摸索であつた。それがようやく軌道に乗つたのである。これから八年間、彼は本屋で働きながら、詩作につとめ、ついに二十六歳で「郷愁」(ペーター・カームンチント)によつて作家としての地位を確立した。その後も迷いと動搖と苦しみは絶えなかつたけれど、生きようとして生き場のない苦しい時代は克服された。しかし、それは詩人ヘッセを産みだすための陣痛の時代であつた。ヘッセ自身言つてゐるように、彼の作品はすべてこれまでの幼少年から青年時代の體驗に胚胎してゐると言

つても、言い過ぎではない。この巻に収めてある四編についても、そうである。その他、主要な作品「車輪の下」「デミアン」「ナルチスとゴルトムント」(知と愛)などは特にそうである。

チュービンゲンの本屋で働いているころ、ヘッセはあまり友だちも持たず、ゲーテやドイツ・ローマン派を熱心に読みながら、かなりローマン的な雰圍氣のうちに生活し、しきりに詩を作った。しかしそれを發表しようとする試みは容易に成功しなかつた。ついに彼は一八九九年、おそらく自費で處女詩集「ローマン的な歌」(Boymantische Lieder)を出版したが、認められるにはいたらなかつた。この詩集の詩は、最初の本格的な「詩集」(Gedichte 1902)にごく僅かし採り入れられなかつたのを見てもわかるように、まだ未熟なものであつた。

同年に出た散文の習作「眞夜中後の一時間」(Eine Stunde hinter Mitternacht)は、ディーデリクスという相當な出版社からであり、ライナー・マリア・リルケたちから好評を受けた。その年ヘッセはバーゼルに移つて、「ヘルマン・ラウシャー」(Hermann Lauscher 1902)を書きつづけた。これは幼年時代の思い出をつづつた美しい散文と詩で、ヘッセの面目をすでによく現わしている。ローマン的で抒情的で音楽的で幻想的な情調と文體は獨特な魅力をもっている。ベルリンの有名な出版者がやがてこれを讀んで、ヘッセに長編の執筆を熱心にすすめたのも、不思議でない。それが「郷愁」となつて、ヘッセの名を一躍たかめたのである。

こうしてヘッセはまだバーゼルの一書店員に過ぎなかつたけれど、徐々に新進詩人として認められだした。一九〇二年、二十五歳の時、「山のあなたの空遠く」の詩で日本にもよく知られているカール・ブッセの編集していた「新ドイツ抒情詩人」叢書の一巻としてヘッセの「詩集」が出たことは、それを裏書きしている。かなり感傷的な甘い詩が多いが、それだけ素直で純情なメロディーに富んでいる。そのころ試みたイタリア旅行を記念する一連の詩や「白い雲」などは、ヘッセの全詩集中でも最も美しいものに數えられる。この詩集は、ヘッセのた

め言いやうのない苦勞を重ねた母にさゝげられたのであつたが、母は、刊行の數カ月まえに死んで、むす子があれほどなりたがつて自分を苦しめたその詩人になれた大きなあかしを見ずにしまつた。

そのころスイスの文士パウ・イルクが上記の出版者フィッシャーにヘッセを推賞した。フィッシャーのすゝめに従つてヘッセは一九〇一年から三年にかけて「郷愁」(Peter Camenzind)を書いた。それは、一九〇四年に出ると、文明に對する懷疑と眞實な生き方に對する人間的な摸索とが、その新鮮な自然感や抒情的な文體と相まつて、大きな共感を呼んで、しきりに版を重ねた。これは、ヘッセが傾倒するゲーテと、ノヴァーリスと、ケラーの流れを汲むドイツの傳統的な成長小説、教養小説であるとともに、孤獨者の魂の告白である。ヘッセはこの次ぎのまとまつた詩集を「孤獨者の音楽」(Musik des Einsamen, 1914)と名づけたが、彼の小説にはすべて孤獨者の告白という副題が冠せられてよいであらう。自己に忠實に生きようとするものは孤獨になる。孤獨者をいつも裏切らず、慰めてくれるものは、自然である。文明のなかに、生きる場所を求めて、幻滅しか見いださなかつたベーター・カールメンチントは、自然のなかに心のふるさとを見いだすのである。都會や文明よりも、雲や山や水や土と溶け合つて生きる青年は、そのまゝヘッセの姿を映している。「私は、自分が本來小説家でないことを知つてゐる。……人々が本來小説と呼ぶものは、行爲する人間のあいだのできごとの表現である。これに反し、いま私たちは孤獨な一個の人間を表現する欲求を感じる」というヘッセのことは、彼の作風を特色づけている。また「私の課題は、客觀的に最上のものを示すことではなくて、自分のものを(それが惱みに過ぎぬにせよ、嘆きに過ぎぬにせよ)、できるだけ純粹に誠實に示すことである」ということを、終始その作品に實證している。ヘッセは「人間の眞の天職は自分自身に達することにほかならぬ」ことを確信しているからである。こゝに全く獨特な、小説家のわくにはまらぬ小説家が誕生したのである。

「郷愁」の完成と前後して、ヘッセは本屋をやめ、イタリアに二度めの旅行をし、アッシジの聖フランシスに關する小さい本を書いた。無欲貧窮のうちに愛と祈りの生活を實踐した聖フランシスはしばらくの間ヘッセの心を強くとらえた。「寓話集」のなかにある「幼き日の聖フランシス」もその形見で、またとなく美しい小品である。「郷愁」が出ると、彼は一九〇四年マリア・ベルヌーイと結婚した。有名な數學者の一門で、ピアノの名手であつた。しかし、ヘッセより九つも年上で、結婚した時、三十六歳であつた。それはほどヘッセの母がヘッセを生んだ年齢であつた。ヘッセは女性のなかに絶えず母を見る傾向をもつてゐるが、この結婚もその現われである。「デミアン」のなかで、少年シンクレールが友人の母に戀するのとも通じる。だが、この非現實的な結婚は、妻の神經病のため、第一次大戰の末期に解消された。子どもは三人もあつたのであるが。——一九三一年に筆者がスイスのモンタニョーラを訪ねた時、五十四歳のヘッセは、長い獨身生活を閉じて、新たに家庭を持つ喜びを語つて、今のニノン夫人を女ともだちとして紹介したのであつた。彼女はラテン系のオーストリア人で、美術史家である。

まえにさかのぼつて、ヘッセは最初の結婚後、ドイツとスイスの國境にあるボーデン湖のほとりのへんびな村ガイエンホーフエンに引つこんで、「大地に近い自然な生活を送る」試みをした。日本では、文名をなすと、大都會に出てくるのが常であるが、ヘッセはまさに逆であつた。彼は原始的な生活をしながら、勉強し、創作にいらした。一九一一年にインド旅行に旅立つまでの七年間は、實のり豊かな期間であつた。人氣作家の美名に浮かれず、精進したことによつて、作家としての基礎ができた。この巻に收められている「青春は美わし」(Schön ist die Jugend)を初めとして、「この岸」(Diesseits, 1907-12)とさう中短編集に含まれてゐるものの全部、同じく「小さな世界」(Kleine Welt, 1933)の一部は、この時代の作であり、クヌルプ(Knulp, 1915)も

ガイエンホーフエンとベルンとで書かれた。「春の嵐」(ゲルトルト、Gertrud. 1910)も全くこの時期のものである。その他、「霧の中」(Im Nebel)という最も有名な詩を初めとして抒情詩がたくさんでき、「繪本」と題される隨筆集の文章の多くが書かれた。いかに充實した時代であるかが察せられるであろう。

だが、まず「車輪の下」(Untern Rad. 1906)が出て、「郷愁」の名聲を揺がぬものにした。これはヘッセの全作品中、最もよく讀まれた長編である。自傳的要素の多いことが深い感銘を與えるのであろう。少年がむきになつて受験勉強をする苦しみと嘆きと不安、入學の喜びと興奮、夏休みの魚釣りや水泳の樂しき、それがあえなくふみにじられて、ついに落伍者となるいきさつが、少年時代をなつかしむすべての人の胸を打つのである。

この小説では、十九世紀末の社會や教育制度の精神分析が行われているが、同時に美しく悲しいふるさとの思い出が綿々とつゞられている。ヘッセはふるさとにそむいて、一九二三年からは國籍もスイスに移してしまつたけれど、ふるさとカルヴをしのぶ心は強く、カルヴにちなむ作品が「車輪の下」を初めとして「ゲルバースアウ」という題の大きな二巻の選集をなしているほどである。「青春は美わし」もその一つ、代表的な一つである。そこには、ヘッセがよその町で本屋勤めをしていたころ、歸省した時のふるさとやわが家の様子が、ほんゝえましく牧歌的に描かれている。この一編は「旋風」という同じふるさとの青春物語と共に、一九一六年に單行本として出たが、書かれたのはもつと早い。のちに共に「この岸」のなかにまとめられた。

「春の嵐」も、音樂好きで、ひたむきで、非社交な孤獨な少年ヘッセをしのばすところから始まつており、自我と幸福との探究の記録であるが、ヘッセの作品のなかでは、一ばん小説らしい構成を持つてゐる。この主人公はオペラを作曲するが、ヘッセ自身「自傳素描」のなかでモツァルトふうのオペラを作曲することを一生の念願とすると書いている。のちの大作「ガラス玉演戲」では、音樂に、人生を律する最高の働きが與えられている。こ

のようにヘッセは非常に音楽的であるが、「春の嵐」を書いたころ、特に音楽家とよく交わり、なかでもオトマル・シェックとは長く親交をつよめた。シェックはヘッセの「エリーザベト」、「ラヴェンナ」など美しいリートを作曲した。またヘッセの異父兄テオドルが聲楽家となり、ヘッセに音楽上の刺激を与えた。「春の嵐」はそういうことを機縁として書かれた。

七年に餘るガイエンホーフエンの田園生活は充分に成果をあげるとともに、汲みつくされてしまった感じであつた。生活の上でも創作の上でも脱皮せずにはいられない欲求に驅られた。それに、前述のように結婚生活にも困難が加わつた。ヘッセは、そういう窮境から脱却し、距離をおいて反省し、新たな視野を得るため、一九一一年の夏から暮れまでインド旅行を企てた。インドは、祖父以來の郷愁の地であり、西欧文明に懷疑的だつた彼には何かしら約束の國と思われたに違いない。しかし、疲れを癒しにインドに行つた彼は失望して歸つた。何か外部のものが救いを提供してくれるということはあり得なかつた。彼は自分のなかに沈潜するほかはなかつた。その沈潜に對してはインドはよい契機と素材とを与えた。「インドから」(Aus Indien. 1913) というすぐれた紀行と、たぐさんの詩ができたほか、「インドの詩」と副題されてゐる「ジッダルト」(Siddhartha. 1922) が書かれた。これはだいたいぶたつてもうスイスのモンタニョーラに移つてから執筆されたが、インド旅行の産物であることは言うまでもない。バラモンの子の求道の生活を通して作者自身の求道の體驗を描いたもので、ヘッセの全作品中最もよくまとまつた完成された藝術品である。だが、いわば自分のことしか書かないヘッセにとつて、バラモンの生活を書くことは至難であつた。それで第一部と第二部のあいだに一年半も筆をおき、禁欲的な瞑想的な生活を實踐した。彼は「當時——もちろん初めてではないが、いつよりも厳しく、みずから生活しなかつたことを書こうとするのは無意味だ、という經驗をした」からである。「ジッダルト」の第一部はロマン・ローラン

に、第二部は日本に長くいた従兄グンデルトにさへげられた。

しかし、この作品のまえになお多くの事件と作品とがある。インド旅行後、彼はスイスの首府ベルン郊外の画家の家に移った。そこで「湖畔の家」(ロッスハルデ、Roshalde, 1914)を書いた。藝術家の結婚生活とその分裂とを描いたもので、自分のなま／＼しい體驗にもとづいている。

それからまもなく第一次世界大戦が起つた。ヘッセはドイツの捕虜を慰問するために自發的に雑誌を編集し、圖書を集めて送る仕事にせわしく携つた。しかし彼は非戰論的な考えを抑えきれず、ドイツの作家や學者がきそつて血迷つた愛國的な叫びをあげ、憎惡をかき立てているのに、黙つていられなくなり、控え目ではあるが、「おお、友よ、そんな調子で叫ばないで！」と訴えたため、ドイツの言論界から、賣國奴とのゝしられ、多くの出版社や新聞雑誌から締めだされた。こういうところにも、ヘッセの非社交的な非妥協性と眞率さが現われている。

そのためヘッセは祖國から孤立し、經濟的にも苦境に陥つた。第二次大戦の際も同様であつた。ヘッセの著作はドイツでは「好ましからぬ文學」として紙の割當てを拒まれ、出版することができなくなつた。そのためスイスだけで出版することを餘儀なくされ、ごく少い讀者で甘んじなければならなかつた。しかしヘッセは、第一次大戦で苦境に立つた時、深い内省を促され、戰爭を初めあらゆる惡と混亂との責任を外に求めず、自分の内に追求した。そして世界の墮落と惡とに自分にも共同の責任があることを痛感した。そこに「第二の大きな變化」が行われた。第一の變化が行われた時、即ち彼が詩人になりたいという願ひを起した時、秀才ヘッセは悪い生徒になり、人々から白眼視されたように、今度もヘッセが今までの抒情的な作風を離れ、ひたむきな自己追求と嚴しい懷疑のとりこになると、これまでの讀者はヘッセに失望しだした。しかしヘッセは一途に内面への道を歩き出した。自己をつきつめて眞我に達し、自己のなかに神を見ることが、彼の生活と作風の基調となつた。「漂泊の人」

(クヌルプ)も「デミアン」(Denian. 1919)も、「メールヒェン」(Märchen. 1919)も、そうした内面的な戦いのうちに書かれた。しかしそれにしてもこの三つは深い苦しみのうちに、なんとという美しさをこめていることであろう。そしてその美しさのなかにひそんでいるにがい懷疑は、「クリングゾルの最後の夏」や「荒野の狼」(Stepenwolf. 1927)では、いよ／＼強くなつた。しかし、「人類の魂が危険に陥り、深淵に迫っていることを隠してはならぬ」というヘッセの警告は豫言者的なひびきを持つていた。果然、第二次大戦はその警告の早まつていなかつたことを示した。だが、同時に彼は「われ／＼は人類の魂の不滅を信じることも隠してはならぬ」と言い、決して絶望せず、内面的に積極的な面からも創作をつづけた。「ジッタルタ」や「クリングゾル」などを集めた「内面への道」(Weg nach Innen. 1931)はその志向を示している。魂の國の建設、それがこのち晩年の彼の創作の大きな主題になつた。「知と愛」、「東洋行き」、「ガラス玉演戯」などがそれである。

美しい友情の物語「知と愛」(ナルチスとゴルトムント、Narziss und Goldmund. 1930)の執筆中に書かれた随想のなかでも、ヘッセは自分の散文はすべて「魂の傳記」だと言っている。「どの作品でも、問題となつてゐるのは、できごとや、もつれや、緊張ではない。すべて、つきつめれば、獨白であつて、そのなかでたゞひとり的人物が世界と自我とに對する關係において考察される。」

「知と愛」では理性を代表するナルチスと愛欲を代表するゴルトムントとふたりの人物の對話になつてゐるけれど、それはおし詰めれば、ヘッセの、いや、二つの魂を持つてゐる人間というものの獨白に低かならない。ファウストのいわゆる二つの魂である。そしてふたりの人物に分けられたこの魂は、友情のなかで溶け合つて、この上もなく美しく高い調和のしらべをかなでる。この二つの原理の戦いと調和とは人間にとつて永遠の課題である。まさしくこれはヘッセのファウストである。そうたとすると、「ガラス玉演戯」(Das Glasperlenspiel. 1943)

は「ウィルヘルム・マイスター」に相應する。まさしくそれは雄大な教養小説であり、理想郷物語である。そしてこの二大作のあいだに「東洋行き」(Die Morgenlandfahrt, 1932)がはさまっている。そこに描かれている巡禮は、どこにもないが、常に到る處で、例えば佛陀やプラトンやモツァルトやノヴァーリスなどによつて行われている眞善美への旅である。精神のふるさとを求める人々の心のなかで絶えず行われている旅である。だから、そこにはいろいろな人物が登場するが、それは「私自身のさまざまに形を變えた化身である」とヘッセは言っている。

二度めの轉身の記録「デミアン」以後、右記の主要小説のほかに、詩や短編や童話や寓話や隨筆がたくさんある。すでに五十歳のころから神經痛と眼病のために悩まされているが、今日まで終始まめに仕事をしつゝけてきた。この放浪児はついに「怠慢の美德」を身につけなかつたと苦笑している。

詩集には、「孤獨者の音楽」以後、「夜の慰め」(Trost der Nacht, 1929)、「新詩集」(一九三七年)などがあり、全部の詩が戦後一卷にまとめられた。

隨想には、「湯治客」(Kurgast, 1925)、「繪本」(Bilderbuch, 1926)、「觀察」(Betrachtungen, 1928)、「思ひ出草」(一九三七年)などがあり、政治的な感想をまとめたものに、「戦争と平和」(Krieg und Frieden, 1946)がある。また、「世界文學をどう讀むか」(一九二九年)、「ゲーテへの感謝」(一九三二年)など、すぐれた文學論がある。

童話や寓話や短編を集めたものに、「寓話集」(Fabeln, 1935)、「夢のあと」(Traumfahrt, 1945)などがある。

ヘッセは四十歳を越えてから、心の内外の空虚を慰めるために水彩画をかきたした。それに詩や文を添えて本